

盈虛

中島敦

青空文庫

衛の靈公の三十九年と云う年の秋に、太子蒯聵が父の命を受けて斉に使したことがあり、途に宋の国を過ぎた時、畑に耕す農夫共が妙な唄を歌うのを聞いた。

既定爾婁豬

盍歸吾艾

牝豚はたしかに遣つた故

早く牝豚を返すべし

衛の太子は之を聞くと顔色を変えた。思い当ることがあつたのである。

父・靈公の夫人（といつても太子の母ではない）南子は宋の国から来ている。容色よりも寧ろ其の才氣で以てすつかり靈公をまるめ込んでいるのだが、此の夫人が最近靈公に勧め、宋から公子朝という者を呼んで衛の大夫に任じさせた。宋朝は有名な美男である。衛に嫁ぐ以前の南子と醜関係があつたことは、靈公以外の誰一人として知らぬ者は無い。二人の関係は今衛の公宮で再び殆どおおっぴらに続けられている。宋の野人の歌うた牝豚牡豚とは、疑いもなく、南子と宋朝とを指しているのである。

太子は斉から帰ると、側臣の戲陽速を呼んで事を謀つた。翌日、太子が南子夫人に挨

拶に出た時、戯陽速は既に匕首あいくちを呑んで室の一隅の幕の陰に隠れていた。さりげなく話をしながら太子は幕の陰に目くばせをする。急に臆したものが、刺客は出て来ない。三度合図をしても、ただ黒い幕がこそぞ揺れるばかりである。太子の妙なそぶりに夫人は気が付いた。太子の視線を辿り、室の一隅に怪しい者の潜んでいるを知ると、夫人は悲鳴を挙げて奥へ飛び込んだ。其の声に驚いて靈公が出て来る。夫人の手を執つて落着けようとするが、夫人は唯狂気のようになわたし子が妾わたりを殺します。太子が妾わたりを殺します」と繰返すばかりである。靈公は兵を召して太子を討たせようとする。其の時分には太子も刺客も疾とうに都を遠く逃げ出していた。

宋に奔り、続いて晋に逃れた太子かいがいは、人毎に語つて言つた。淫婦刺殺せつかという折角せつかの義挙も臆病な莫迦者ばかの裏切によつて失敗したと。之も矢張衛から出奔した戯陽速が此の言葉を伝え聞いて、斯う酬いた。とんでもない。こちらの方こそ、すんでの事に太子に裏切られる所だつたのだ。太子は私を脅して、自分の義母を殺させようとした。承知しなければ屹度きつと私が殺されたに違ひないし、もし夫人を巧く殺せたら、今度は必ず其の罪をなすりつけられるに決つてゐる。私が太子の言を承諾して、しかも実行しなかつたのは、深謀遠慮の結果なのだと。

晋では当時は范氏 中行氏の乱で手を焼いていた。齊・衛の諸国が叛乱者の尻押をするので、容易に埒があかないものである。

晋に入つた衛の太子は、此の国の大黒柱たる趙簡子の許に身を寄せた。趙氏が頗る厚遇したのは、此の太子を擁立することによつて、反晋派たる現在の衛侯に楯突こうとしたに外ならぬ。

厚遇とはいつても、故国にいた頃の身分とは違う。平野の打続く衛の風景とは凡そ事変つた・山勝ちの絳の都に、侘しい三年の月日を送つた後、太子は遙かに父衛侯の訃を聞いた。噂によれば、太子のいない衛国では、已むを得ず蒯聵の子・輒を立てて、位に即かせたという。国を出奔する時後に残して來た男の児である。当然自分の異母弟の一人が選ばれるものと考えていた蒯聵は、一寸妙な気がした。あの子供が衛侯だと？ 三年前のあどけなさを考えると、急に可笑しくなつて來た。直ぐにも故国に帰つて自分が衛侯となるのに、何の造作も無いように思われる。

亡命太子は趙簡子の軍に擁せられて意氣揚々と黄河を渡つた。愈々衛の地である。感の地迄来ると、しかし、其処からは最早一步も東へ進めないことが判つた。太子の入国を拒

む新衛侯の軍勢の邀撃に遇つたからである。戚の城に入るのでさえ、喪服をまとい父の死を哭しつつ、土地の民衆の機嫌をとりながらはいらなければならぬ始末であつた。事の意外に腹を立てたが仕方が無い。故国に片足突つ込んだ儘、彼は其処に留まつて機を待たねばならなかつた。それも、最初の予期に反し、凡そ十三年の長きに亘つて。

最早（曾ては愛らしかつた）己の息子の輒は存在しない。己の当然嗣ぐべき位を奪つた・そして執拗に己の入国を拒否する・貪慾な憎むべき・若い衛侯が在るだけである。曾ては自分の目をかけてやつた諸大夫連が、誰一人機嫌伺いにさえ来ようとしない。みんな、あの若い傲慢な衛侯と、それを輔ける・しかつめらしい老猾な上卿・孔叔圉（自分の姉の夫に当る爺さんだが）の下で、蒯瞶などという名前は昔からてんで聞いたこともなかつたような顔をして楽しげに働いている。

明け暮れ黄河の水ばかり見て過した十年余りの中に、気まぐれで我が儘だつた白面の貴公子が、何時か、刻薄で、ひねくれた中年の苦労人に成上つていた。

荒涼たる生活の中で、唯一つの慰めは、息子の公子疾であつた。現在の衛侯輒とは異腹の弟だが、蒯瞶が戚の地に入ると直ぐに、母親と共に父の許に赴き、其処で一緒に暮らすようになつたのである。志を得たならば必ず此の子を太子にと、蒯瞶は固く決めていた。

息子の外にもう一つ、彼は一種の棄鉢すてぱちな情熱の吐け口を闘雞戯に見出していた。射俸しゃこう心や嗜虐性の満足を求める以外に、逞しい雄雞の姿への美的な耽溺でもある。余り裕かない生活の中から莫大な費用を割いて、堂々たる雞舎を連ね、美しく強い雞共を養っていた。

孔叔圉こうしゆくぎよが死に、其の未亡人で蒯瞗の姉に当る伯姫が、息子のかいきよきを虚器に擁して権勢を揮い始めてから、漸く衛の都の空気は亡命太子にとつて好転して来た。伯姫の情夫・渾良夫んりょうふという者が使となつて屢々しばしば都と戚との間を往復した。太子は、志を得た暁には汝を大夫に取立て死罪に抵る咎あるも三度迄は許そと良夫に約束し、之を手先としてぬかり無く策謀を運らす。

周の敬王の四十年、閏十二月某日蒯瞗は良夫に迎えられて長驅都に入った。薄暮女装して孔氏の邸に潜入、姉の伯姫や渾良夫と共に、孔家の当主衛の上卿たる・甥の孔こうかい（伯姫からいえば息子）を脅し、之を一味に入れてクウ・デ・タアを断行した。子・衛侯は即刻出奔、父・太子が代つて立つ。即ち衛の莊公である。南子に逐われて国を出てから実に十七年目であった。

莊公が位に立つて先ず行おうとしたのは、外交の調整でも内治の振興でもない。それは実に、空費された己の過去に対する補償であつた。或いは過去への復讐であつた。不遇時代に得られなかつた快楽は、今や性急に且つ十二分に充たされねばならぬ。不遇時代に惨めに屈していた自尊心は、今や俄かに傲然と膨れ返らねばならぬ。不遇時代に己を虐げた者には極刑を、己を蔑さげすんだ者には相当な懲しめを、己に同情を示さなかつた者には冷遇を与えねばならぬ。己の亡命の因であつた先君の夫人南子が前年亡くなつてゐたことは、彼にとつて最大の痛恨事であつた。あの姦婦を捕えてあらゆる辱しめを加え其の揚句極刑に処してやろうというのが、亡命時代の最も愉快たのい夢だつたからである。過去の己に対して無関心だつた諸重臣に向つて彼は言つた。余は久しう流離の苦を嘗め來たつた。どうだ。諸子にもたまにはそういう経験くすりが薬くすりだらうと。此の一言で直ちに国外に奔つた大夫も二三に止まらない。姉の伯姫と甥の孔こうかいとには、固より大いに酬いる所があつたが、一夜宴に招いて大いに酔わしめた後、二人を馬車に乗せ、御者に命じて其の儘国外に驅り去らしめた。衛侯となつてからの最初の一年は、誠に憑かれた様な復讐の月日であつた。空しく流離の中に失われた青春の埋合せの為に、都下の美女を漁つては後宮に納れたことは附加

えるまでもない。

前から考えていた通り、おのれ己と亡命の苦を共にした公子疾を彼は直ちに太子と立てた。まだほんの少年と思つていたのが、何時しか堂々たる青年の風を備え、それに、幼時から不遇の地位にあつて人の心の裏ばかりを覗いて来たせいか、年に似合わぬ無気味な刻薄さをチラリと見せることがある。幼時の溺愛の結果が、子の不遜と父の譲歩という形で、今に到る迄残り、はたの者には到底不可解な氣の弱さを、父は此の子の前にだけ示すのである。此の太子疾と、大夫に昇つた渾良夫こんりょうふとだけが、莊公にとつての腹心といつてよかつた。

或夜、莊公は渾良夫に向つて、先の衛侯さき輒ちようが出奔に際し累代の国の宝器をすつかり持去つたことを語り、如何にして取戻すべきかを計つた。良夫は燭を執る侍者を退席させ、自ら燭を持つて公に近付き、低声に言つた。亡命された前衛侯も現太子も同じく君の子であり、父たる君に先立つて位に在られたのも皆自分の本心から出たことではない。いつそ此の際前衛侯を呼戻し、現太子とその才を比べて見て優れた方を改めて太子に定められては如何。若し不才だつたなら、其の時は宝器だけを取上げられれば宜い訳だ。……

其の部屋の何処かに密偵が潜んでいたものらしい。慎重に人払いをした上で此の密談

が其の儘太子の耳に入つた。

次の朝、色を作^なした太子疾^がが白刃を提げた五人の壯士を従えて父の居間へ闖^{ちんにゅう}入^{する。}太子の無礼を叱咤^{しつた}するどころではなく、莊公は唯色蒼ざめて戦^{おのの}くばかりである。太子は従者に運ばせた牡豚を殺して父に盟^{ちか}わしめ、太子としての己の位置を保証させ、さて渾良夫の如き奸臣はたちどころに誅^{ちゅう}すべしと迫る。あの男には三度迄死罪を免^すずる約束^がしてあるのだと公が言う。それでは、と太子は父を威すように念を押す。四度目の罪がある場合には間違^{ちゆう}いなく誅^{ちゅう}戮^{うりく}なさるでしような。すつかり氣を呑^ままれた莊公は唯々として「諾^{すべ}」と答えるほかは無い。

翌年の春、莊公は郊外の遊覽地^{せきほ}籍圃に一亭を設け、^{しょう}墻^{へい}、^{しょう}壝^{へい}、器具、^{どんちょう}緞帳^{きら}の類^{すべ}を凡^て虎の模様一式で飾つた。落成式の当日、公は華やかな宴を開き、衛国の名流は綺羅^{きら}を飾つて悉く此の地に会した。渾良夫はもともと小姓上りとて派手好みの伊達男である。此の日彼は紫衣に狐裘^{こきゆう}を重ね、牡馬二頭立の豪奢な車を駆つて宴に赴いた。自由な無礼講のこととて、別に剣を外しもせずに食卓に就き、食事半ばにして暑くなつたので、裘を脱いだ。此の態を見た太子は、いきなり良夫に躍りかかり、胸倉を掴んで引摺り出すと、白

刃を其の鼻先に突きつけて詰つた。君寵たのを恃んで無礼を働くにも程があるぞ。君に代つて此の場で汝を誅するのだ。

腕力に自信の無い良夫は強いて抵抗もせず、莊公に向つて哀願の視線を送りながら、叫ぶ。嘗て御主君は死罪三件まで之を免ぜんと我に約し給うた。されば、仮令たとい今我に罪ありとするも、太子は刃やいばを加えることが出来ぬ筈だ。

三件とや？ 然らば汝の罪を数えよう。汝今日、国君の服たる紫衣をまとう。罪一つ。天子直参じきさんの上卿用たる衷ちゆう甸うじようりよう兩りょう牡ぼくの車に乗る。罪二つ。君の前にして裘を脱ぎ、剣を积かずして食う。罪三つ。

それだけで丁度三件。太子は未だ我を殺すことは出来ぬ、と、必死にもがきながら良夫が叫ぶ。

いや、まだある。忘れるなよ。先夜、汝は主君に何を言上したか？ 君侯父子を離間しようとする佞臣奴ねいしんめ！

良夫の顔色がさつと紙の様に白くなる。

之で汝の罪は四つだ。という言葉も終らぬ中に、良夫の頸はがつくり前に落ち、黒地に金で猛虎を刺繡した大綾帳に鮮血がさつと迸る。

莊公は眞蒼な顔をした儘、黙つて息子のすることを見ていた。

晋の趙簡子の所から莊公に使が来た。衛侯亡命の砌、及ばず乍ら御援け申した所、帰國後一向に御挨拶が無い。御自身に差支えがあるなら、せめて太子なりと遣わされて、晋侯に一応の御挨拶がありたい、という口上である。かなり威猛高な此の文言に、莊公は又しても己の過去の慘めさを思出し、少からず自尊心を害した。国内に未だ紛争が絶えぬ故、今暫く猶予され度い、と、取敢えず使を以て言わせたが、其の使者と入れ違いに衛の太子からの密使が晋に届いた。父衛侯の返辞は單なる遁辞で、実は、以前厄介になつた晋国が煙たさ故の・故意の延引なのだから、欺されぬよう、との使である。一日も早く父に代り度いが為の策謀と明らかに知れ、趙簡子も流石に些^{さすが}に些^{いさき}が不快だつたが、一方衛侯の忘恩も又必ず懲さねばならぬと考えた。

其の年の秋の或夜、莊公は妙な夢を見た。

荒涼たる曠野に、^{のき}檐も傾いた古い楼台が一つ聳え、そこへ一人の男が上つて、髪を振り乱して叫んでいる。「見えるわ。見えるわ。瓜、一面の瓜だ。」見覚えのあるような所と

思つたら其処は古の昆吾氏の墟いにしえで、成程到る処累々たる瓜ばかりである。小さき瓜を此の大きさに育て上げたのは誰だ？ 慘めな亡命者を時めく衛侯に迄守り育てたのは誰だ？ と樓上で狂人の如く地団駄を踏んで喚いている彼の男の声にも、どうやら聞き憶えがある。おやと思つて聞き耳を立てるに、今度は莫迦にはつきり聞えて来た。「俺は渾良夫こんりょうふだ。俺に何の罪があるか！ 俺に何の罪があるか！」

莊公は、びつしより汗をかいて眼を覚した。いやな氣持であつた。不快さを追払おうと露台へ出て見る。遅い月が野の果に出た所であつた。赤銅色に近い・紅く濁つた月である。公は不吉なものを見たように眉を顰しかめ、再び室に入つて、気になるままに灯の下で自ら筮ぜ竹いちくを取つた。

翌朝、筮師を召して其の卦けを判ぜしめた。害無しと言う。公は欣び、賞として領りょうゆう邑いを与えることにしたが、筮師は公の前を退くと直ぐに倉皇そうこうとして国外に逃れた。現れた通りの卦を其の儘伝えれば不興を蒙ること必定故、一先ず偽つて公の前をつくろい、さて、後に一散に逃亡したのである。公は改めて卜ぼくした。その卦兆の辞を見るに「魚の疲れ病み、赤尾を曳きて流に横たわり、水辺を迷うが如し。大国これを滅ぼし、將に亡まよびんとす。城門と水門とを閉じ、乃ち後より踰こえん」とある。大国とあるのが、晋であることだけは

判るが、其の他の意味は判然しない。兎に角、衛侯の前途の暗いものであることだけは確かと思われた。

残年の短かさを覚悟させられた莊公は、晋国の圧迫と太子の専横せんおうとに対する處置を講ずる代りに、暗い予言の実現する前に少しでも多くの快樂を貪ろうと只管ひたすらにあせるばかりである。大規模の工事が相繼いで起され過激な労働が強制されて、工匠石匠等の怨嗟えんさの声が巷ちまたに満ちた。一時忘れられていた鬪雞戯への耽溺も再び始まつた。雌伏時代とは違つて、今度こそ思い切り派手に此の娯しみに耽ることが出来る。金と權勢とに饜あかして国内外から雄雞の優れたものが悉く集められた。殊に、魯ろの一貴人から購め得た一羽の如き、羽毛は金の如く距けづめは鉄の如く、高冠昂尾こうかんこうび、誠に稀に見る逸物である。後宮に立入らぬ日はあつても、衛侯が此の雞の毛を立て翼を奮う状を見ない日は無かつた。

一日、城樓から下の街々を眺めていると、一ヶ所甚だ雑然とした陋穢ろうわいな一劃が目に付いた。侍臣に聞えば戎人の部落だという。戎人とは西方の化外けがいの民の血を引いた異種族である。眼障りだから取払えと莊公は命じ、都門の外十里の地に放逐させることにした。幼を負い老を曳き、家財道具を車に積んだ賤民共が陸續りくそくと都門の外へ出て行く。役人に追

立てられて慌て惑う状さまが、城楼の上からも一々見て取れる。追立てられる群衆の中に一人、際立つて髪の美しく豊かな女がいるのを、荘公は見付けた。直ぐに人を遣つて其の女を呼ばせる。戎人己氏きしなる者の妻であつた。顔立は美しくなかつたが、髪の見事さは誠に輝くばかりである。公は侍臣に命じて此の女の髪を根本から切取らせた。後宮の寵姫の一人の為にそれで以て髪かもじこしらを拵えようというのだ。丸坊主にされて帰つて来た妻を見ると、夫の己氏は直ぐに被衣かずきを妻にかずかせ、まだ城楼の上に立つてゐる衛侯の姿を睨んだ。役人に答むち打たれても、容易に其の場を立去ろうとしないのである。

冬、西方からの晋軍の侵入と呼応して、大夫・石圃せきほなる者が兵を挙げ、衛の公宮を襲うた。衛侯の己を除こうとしているのを知り先手を打つたのである。一説には又、太子疾との共謀によるのだともいう。

荘公は城門を悉く閉じ、自ら城楼に登つて叛軍に呼び掛け、和議の条件を種々提示したが石圃は頑として応じない。やむなく寡すくない手兵を以て禦がせてゐる中に夜に入つた。

月の出ぬ間の暗さに乘じて逃れねばならぬ。諸公子・侍臣等の少数を従え、例の高冠昂尾の愛雞を自ら抱いて公は後門を踰える。慣れぬこととて足を踏み外して墜ち、したたか

股を打ち脚を挫いた。手当をしていゝ暇は無い。侍臣に扶けられつつ、真暗な曠野を急ぐ。兎にも角にも夜明迄に国境を越えて宋の地に入ろうとしたのである。大分歩いた頃、突然空がぼうつと仄黄色く野の黒さから離れて浮上つたような感じがした。月が出たのである。何時かの夜夢に起されて公宮の露台から見たのとまるでそつくりの赤銅色に濁つた月である。いやだなど莊公が思つた途端、左右の叢から黒い人影がばらばらと立現れて、打つて掛つた。剽盜 ひょうとう か、それとも追手か。考える暇もなく激しく鬪わねばならなかつた。諸公子も侍臣等も大方は討たれ、それでも公は唯独り草に匍いつつ逃れた。立てなかつたために却つて見逃されたのでもあろう。

気が付いて見ると、公はまだ雞をしつかり抱いていゝ。先程から鳴声一つ立てないのは、疾うに死んで了つていたからである。それでも捨て去る気になれず、死んだ雞を片手に、匍つて行く。

原の一隅に、不思議と、人家らしいもののかたまつた一郭が見えた。公は漸く其處迄通り着き、氣息奄々 えんえん たる様でとつつきの一軒に匍い込む。扶け入れられ、差出された水を一杯飲み終つた時、到頭來たな！ という太い声がした。驚いて眼を上げると、此の家の主人らしい・赭ら顔の・前歯の大きく飛出た男がじつと此方を見詰めている。一向に見憶

えが無い。

「見憶えが無い？ そうだろう。だが、此奴なら憶えているだろうな。」

男は、部屋の隅に蹲うすくまつっていた一人の女を招いた。其の女の顔を薄暗い灯の下で見た時、公は思わず雞の死骸を取り落し、殆ど倒れようとした。被衣を以て頭を隠した其の女こそは、紛れもなく、公の寵姫かもじの髪のために髪を奪われた己氏きしの妻であつた。

「許せ」と嘆れた声で公は言つた。「許せ。」

公は顫える手で身に佩おびた美玉をとり外して、己氏の前に差出した。

「これをやるから、どうか、見逃して呉れ。」

己氏は蕃刀の鞘さやを払つて近附きながら、ニヤリと笑つた。

「お前を殺せば、璧たまが何処かへ消えるとでもいうのかね？」

これが衛侯かい、瞞がいの最期であつた。

青空文庫情報

底本：「中島敦全集 2」ちくま文庫、筑摩書房

1993（平成5）年3月24日初版発行

1999（平成11）年10月15日第5刷発行

初出：「政界往来」

1942（昭和17）年7月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点翻訳5-86）を、大振りにつくっています。

入力：小林繁雄

校正：多羅尾伴内

2003年7月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作成されました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

盈虛

中島敦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>